

|                  |                                                                                                                                                                                                                   |
|------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | ギイディングスの歴史学説 ( 上 )                                                                                                                                                                                                |
| Sub Title        |                                                                                                                                                                                                                   |
| Author           | 野村, 兼太郎                                                                                                                                                                                                           |
| Publisher        | 慶應義塾理財学会                                                                                                                                                                                                          |
| Publication year | 1921                                                                                                                                                                                                              |
| Jtitle           | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.3 (1921. 3) ,p.449(139)- 457(147)                                                                                                                                  |
| JaLC DOI         |                                                                                                                                                                                                                   |
| Abstract         |                                                                                                                                                                                                                   |
| Notes            | 雑録                                                                                                                                                                                                                |
| Genre            | Article                                                                                                                                                                                                           |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210301-0139">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210301-0139</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中世 における科學の進歩はそか人間の道德律と背 することのなかつた點において優秀なるものがある。

### 十三

中世紀がなし遂げた諸種の效績の中で最も偉大なる效績はその藝術である。殊にその表現たるゴシック建築において之を見ることが出来るのである。ギリシア並にローマの建築が一指導者の命令によつて、建設せられたのに反して、中世のゴシック建築は各労働者の労働そのものが直ちに藝術となつて建築に表現されたのである。ローマ、ギリシアの建築が貴族的、專制的で、従つてその建築に従事した労働者が奴隸的狀態にあつたのに反して、中世における労働者とその指導者との間の關係は經濟的從屬の關係ではなくつて、技術上における優劣の問題であつた。従つて彼等の間には技術の崇拜はあつた。

けれども、物質關係における從屬はなかつたのである。即ち技術者間における關係は甚だ自由であつた、單に技術上の關係においてのみ、劣者は優者の指導を俟つ關係にあつたのである。かゝる自由なる關係はその藝術の上に直ちに表現されて、ゴシック建築が協同主義の精神によるにも拘らず、この建築に参加した労働者の個性は、即ちその藝術的精神は、建築の一柱一石に表現されたのである。かゝる自由を享受した彼等はまた自由の限界を知つてゐた。さうしてこの自由の限界を嚴密に守ることによつて、中世紀は調和ある社會となつたのである。斯くの如き指導的精神によつてのみ、ゴシック建築の如き優秀なる藝術を生むことが出来たのである。

以上を以て中世紀の主要なる文化現象に對するPentyの論述は終つてゐる。如何にして斯く

の如き文化を生んだか。それは、中世紀が一の正しい精神の上に立脚し、その精神を體現する場合において、機能的組織をとり、その機能的組織が互に相侵することがなかつたからである。かくてPentyはこの見地から現代の社會問題を見、それが放漫なる個人主義と集中主義にあることを發見し、この不正なる社會を指導的原理のあつた中世的組織に復活することによつて解決せんとするものである。Pentyの史觀は斯くの如き立場にあるのである。

附記、ヤルド社會主義の最初の文獻の一つであるPenty:—  
Restoration of Guildsystem, 1906 が絶版の爲め、同氏のヤルドに關する詳細なる意見を聞くことを得ないのは、筆者の最も遺憾とするところである。(完)

## ギイディングスの 歴史學說(上)

野村兼太郎

社會學者として著名な Franklin H. Giddings が最近 "Political Science Quarterly" vol. xxxv. No. 4, "A Theory of History" なる一篇を掲げて、歴史に對してある一つの觀察を下して居る。多少興味ある問題であると思ふから敢てここに紹介する。此の一篇は其の意譯である。

かの「死の書」The Book of The Dead が編纂されない以前に、すでに歴史に關する學說は存して居たやう。此の痛快な Nietzsche 文獻の表題自體が存して居たことを暗示する。是は更に疑はしいことではあるが、恐らく吾人 Adam の家族達が忘れられてしまつた後と雖も歴史學說は存するだらう。Friedrich Hegel と Karl Marx

の知的遺物が灰になつてしまつた後でも、尙ほ廣汎なる(そして尤もらしき)歴史哲學が存在することはあり得べきことである。

理論は峻刻である。そして多少心目を索く。

然し利益がない。歴史學說の数は殆ど歴史家の數程澤山ある。それ等の歴史性は殆どそれ等が記録の事實であると云ふ状態に存して居る。歴史學說が知的内容を有する限り、是等は歴史と云ふより哲學である。而して重なるものは哲學者に依つて發達させられたので、歴史家に依つてではない。勿論理由は簡單である。第一に歴史は事實の詳説であり、具體的である。第二に恐るゝ一般化を試みる。それは「位置」「一般的状況」及び「形勢」を描く。斯して哲學ともなり、(幸か不幸か)社會學ともなる。

故に無遠慮な社會學者が更に一般化して、歴史學說を個別的にではなく、一般に種類若しく

は典型に依つて研究したとしても、何等の誤を發見し得ないだらう。

Plato から Conte, Conte から Adam の兄弟に至る迄、歴史學說は五つに類別されるだらう。

第一の種類は神學其の他の形而上學者の定命的哲學を含む。第二のものは社會的自決の哲學である。Plato の見解は以上兩者の中間にある。一部に於いて神が人事を處理し、一部に於いて人類が自由に計畫し、自由に成就する。

第三のものは地理的若しくは「環境的影響」に基づく。Montesquieu の著作は古典的例である。然し Ellen C. Semple & Ellsworth Huntington のやうな今日の學者の勞多き著作は更に實質的である。

第四の種類は學說は歴史を傳襲産(遺傳ではない)と云ふ言葉で説明せんとするものである。

傳襲産と云ふのは吾人が現在享樂する人間活動

の全産物(及び副産物)である。吾人の習慣(その

本來の本能的性質と區別して)、吾人の技術、吾人の知識及び吾人の財産を包含する。是等の傳

襲産、即ち歴史は河が砂土を洗ふ時にするやうに曲りくねつた河路を切り開く。全然似ては居

ないが、Conte, Buckle, 及び Karl Marx 等は歴史を傳襲産の言葉を以つて解釋した。Conte は

人類は形而上的に依る神學的のものから實證的な若しくは科學的な知的習慣に移るものと見た。Buckle は地理及び風土に於ける歴史の自然

な解釋を過古及び現代の第二次的若しくは文化的な環境を以つて正さんとする。Marx の「唯

物」史觀はその爲めに生じた誤れる誇大の要求にも拘らず、世界の道德上單に物質的である。

社會的に組織せる人類に起つたこと、若しくは起り得るすべてのことを財産の聚合や作用に歸

するもの一つの試である。

第五のそして最後の歴史哲學は近世のものである。是等は宇宙の動學ダイナミクスの書からのものである。

それは人間經驗の流を太陽系や雷雨を説明する場合の如く説明する。Herbert Spencer & Brooks

Adams は空想を容るゝことなく物理的勢力の減少に歸著する。生物學者や人類學者は歴史を

遺傳と自然淘汰として見る。物理學及び生物學を許容するなら、余は人類の歴史は心理的若しくは行爲行狀の平衡(equilibrium)であると思ふ

だらう。

此の議論の前提となるものは新しいものではない。現代の風潮は是を否定し、蔑視する。其

の前提は人類は平等に生れるものでもなく、又時間の始から存在して居たものではないと云ふ

ことである。恰も熱エネルギーが空間に平等に分布されてなく、而してそれが爲めに活潑な運

動に於ける分子から鈍き運動に於ける分子に放射するやうに、肉體的活力も種族の間に平等に分布されて居ない。それが故にある系統のものは没落するか若しくは虚弱を忍んで生存する。又刺激に對する行為的反動はそれが本能的たると理性的たると、或ひは又衝動的たると先見的たるを問はず、更に活潑となり疲れず、更に複雑となり、更に適化し、人類の他の聚合に於けるよりも更によくある聚合心の部分に於いて相關聯する。而して是が故に實際の活動は活潑なる人口、活潑なる合成團體、活潑なる組織階級から、鈍き人口、鈍き團體、鈍き階級に零れてゆく。流動が始まつた時に歴史が始り、それが終ると歴史も終る。

此の學說が他の歴史學說よりも純粹科學として明瞭であるか如何かは確かではない。然し若し明瞭なることが事實であるなら、若しくは事

實である限り、その爲めに得られる實證的價值を有する。現在に於いて世界は知的にも困難して居るし、道德的にも粉亂して居る。すべての人類の假定的平等の下に社會を改造せんとして居る。若しもそれが成功するならば、最初からの歴史的事業を破壊するだらうし、人類を滅亡に歸せしめるだらう。

故に余の企は一つの冒險である。然し余及び余と共に行かんとする者はそれをなす前に、先づ具體的に歴史に就いて、單なる空想、物語を排して氣儘に低回しやう。(さうするのは愉快なことでもあるから。)

## 二

歴史は一種の劇である。各人の情熱が野蠻に或ひは知的に、他の各々と人生の舞臺で争闘する。更にそれ以上に歴史は吾人の認識力を越えた恐るべき大なる創造的努力である。又吾人の

## 三

一定の付度能力を壓し去るやうな事業でもある。而して又歴史は常に各時代の子供にも大人にも興味を有たせる物語である。

すべてのよき物語と同様に中途(E medias res)から始まる。即ち人類がすでに永く生活し、彼等の行為を書き得るやうになつた時に始まる。吾人の現在の知識の限り於いては Egypt 及び Sumer を以て始とする。

然し乍ら又すべてのよき物語のやうに歴史の序言が書かれる時には、其以前の前に及ぶ。彼等の以前の職業、知識、彼等の興味、彼等の聯合及び遍歴並びに如何して彼等を知り得るやうになつたか等のことに就いて、多少とも説明する。歴史の物語に於ける此の章を今日では歴史以前と云ふ。此の時代には記録がない。それに關する材料は地理學と生物學、人類學と考古學とから求めなければならない。

其の最初、熱帶の森林に物を投げ安全な地位から敵を攻撃することを知つて居た猿が居る。

やがて今のゴリラやチンパンジーより大きく、もう少し伶俐な猿を見る。彼等は殆ど直立するところが出来、棍棒と投石を以て闘ふ。彼等は其の子供達の爲めに茅屋を作ることが出来、地上を歩き廻ることを恐れない。彼等の骨は遠く India から西南 Europe に發見される。現に吾人は第三紀層の Tava の Pithecanthropus Erectus を見る。是は猿のやうに野蠻で、そして比較解剖學者が homo sapiens であるか如何かと疑つた程人間に似て居る。兎に角是は人間と其の祖先との間の一の「聯關」である。最早欠けて居ない。

次ぎに骨がある——それは單なる骨だが、吾人の空想を刺激する。Heidelberg の顎 Pitdown

の頭蓋、Neanderthal の頭蓋——是等は人間の遺物である。是に就いては疑ない。そして是等の系列が次第に猿の根跡を失つて、十萬年の間に吾人が現在屬して居る人間の種族が始まる有様を示して呉れる。

此の點から吾人は初期の人間の作つた物、其の技術品、即ち、武器、道具、什器、並びに是等のものを作り残した場所に就いて觀察する。最初に其の配偶と子供及び兄弟姉妹、並びに兄弟姉妹達の配偶と子供等と共に森の中、河の畔に住む。丁度今日 Andaman Islands, Africa, Brazil 等に於いて見られるやうな數多の小さな部落をなして居た。さもなくば Australians や Bushmen のするやうに叢の間を流浪した。彼は狩獵と漁獵とをなし、ゴリラのそれと大差ないやうな小屋を作る。矢や槍の先には無雜作に削つた石をつける。彼等は削つた樹皮の蘆、柳や

蘆の籠を編む。

彼等は廣く散布して Asia や Europe の北部にも居た。推量するに彼等は氷河時代の溫和な天候の下に亞熱帶の動物と共に彼等の途を切り開いたのだらう。南方に來たれる新しい氷河の水が彼等を襲つたので、彼等は退いた。多くは死に僅かに生残つた。彼等は南 Europe の穴の中に避難した。以前削いだ石を衝突させて火を得ることを知り、長い間此の穴に住んだ。彼等は石の斧や槌、骨の針を作つた。獸皮を著た。象牙に彫つた。彼等は書くことを學び、穴の壁に現實的な(而も美しい)繪を書いた。穴熊、sabretoothed tiger. 彼等の恐れた Mastodon 及び彼等の支柱たる馴鹿を描いた。是等は古石器時代の著名な人間である。

他の場所北 Africa 西南 Africa に於いては古人は石器時代新部のものになる。彼等は其の

石の器具を磨く、粘土を以つて陶器を作り、其の上に刻んだ線の中に石膏をすり込み、幾何的作圖を施したりする。時代は更に經過する。手の勞働で土地を耕すやうになる。彼等は樹を丸太になし、それを以つて柱や杙や梁や板を作る。彼等は住むべき家を作る。土の中に柱を打ち込んだり、水中に杙を立てて、其の上に床を張り、儀式を行つて然る後家を建てる。彼等は丸木船や小舟を作る。時代は再び經過する。Africa や Arabia, 西 Asia や東 Europe の草原に山羊や羊の群、其の他家畜の群を看視して居る人類を見る。Africa, Arabia, Caspian Sea の東、中央 Asia の沃地に樹木、石、乾いた粘土等様々な材料で作られた家が建つ。家畜の庇護所、水の満ちた濠、水槽や井戸、穀物小屋、注意して保持されて居る火、儀式を行ふ秘密な場所等が見出される。

多くの時代が往來した。北 Africa を通じて、

中央及び南 Asia を通じて、中央及び南 Europe を通じて人類は村落に及び小さな町に住んだ。是等は Euphrates や Nile 河に沿ふて數珠のやうに並んだ。古代の樺や松のドロイドの春景に對して連山の麓の靜な谷に彼等は隠れた。岩の背に蓋はれてすまじい高原の嵐をも物としなかつた。柱で支へられて居る床の上に彼等は Swiss と Italia の湖水の中に生活して居た。若しくは乾いた土地だが其の周圍には壕があり、——不思議にも湖と同じ構造のところに住んで居た。是等すべての種々なる状況の下で彼等は家や山羊や家畜を養ひ、作物を行つた。身分や仕事の分割が見られる。社會(a community)の人々が皆最早同一種類ではない。事實「場所」に就いても屢々一つの村落ではなく、二つの接近せる村落よりなる。優れた村落の方には其の

周囲の土地を所有し支配する人々が住む。劣れる方には「他國人」(aliens)が住む。戦争依つて撲滅された人々、若しくはその生れた種族から犯罪人として追はれた人々、是等の人々の雑多なる集合である。彼等は征服された。命令された仕事をなすと云ふ條件の下に止まるを許され、保護され、土地を配與される。是等は「村落共產團體」である。經濟史家は是をを描いて「自由な」、田園的な、共產的な民主政體であると云ふ。

各住居の近くに墓所がある。「長形の塚」か、或ひは「圓形の塚」であるが、折々石の圓んだ塚であることもある。それは恐らく古代人の死骸の横つて居た穴の模倣であらう。上部に重い楣を支へて居る二つの切つてない柱が門である。其處此處に Persia 海から西南 England の間に又更に印象的な巨石の記念碑がある。巨大な柱の

道路や Stonehenge のやうな大きな圓形の圍等がある。大方是等は祭の行列や競技の際に使つたのだらう。(Breasted: Ancient Times, P. 28)

更に最後の光景を以つて歴史以前のフキルムは終る。山や谷の人々が銅を又ある所では錫を掘り出した。夜空に對してなす閃光は彼等がそれ等の金屬を粗末な土の埧の中で混合し熔解して居る場所を密告する。今や彼等は青銅を作りつゝある。

人類の種族は今や地球上に擴がつた。其の種族的多様は、優れたるも劣れるも、廣い地理的習慣と同一になつた。Australian-African の優れた部分は黒く、縋れ毛の突顎な且つ普通長頭である。Asian-American は Asia に於いては黄色で、America では銅色であるが、共に直立した毛で普通短頭顱である。European-Polynesian は Europe 及び北日本を含んで北部 Asia に於いて

は白色、北 Africa、南 Asia 及び南太平洋諸島に於いては褐色であるが、普通波うてる毛を有し、正方形的であるが頭蓋の形は長頭も短頭も中間のものもあらゆるものを含む。

歐洲白色人種は最初の區別に依れば三種類に分れた。即ち長頭の Mediterraneans、長頭の Balts の及び短頭の Caspians、(比較的後に來著したもの)であるが、今や Caspians が Alpine 山脈の南の Mediterranean 及び北方の Balts と雜婚した爲めに四種類となつた。Mediterraneans は高くはなすがしつかりとして黒髮黒眼の薄黒である。Balts は高くて角張つて居る軽い毛で青眼の白面である。Alpines 即ち Caspian-Mediterranean の雜種は短頭で、太つた、そして色は、區々であるが Mediterranean よりは通常明るう。Danubeans 即ち Caspian-Baltic の雜種は短頭で、高く、力強く作られ、髻髮共に

赤く、灰色の眼をした、紅色である。(註一)

白色人間の勢力ある言語は變化が多くなつた。Aryan の言葉は亞細亞歐維巴の草原地を通じて使用されるすべての人類の中に感激に對する反作用がある。其の中には數多の自然物、特に泉、池、河、絕壁、樹木、爬蟲類や鳥類、及び草原地に於いて牡牛。是等のものに對する恐るべき逃避や恐るべき遭遇をも含んで居る。

(註二) Nordic と云ふ言葉は今普通樹白色の種族の全體に北方の半は blond のものに用ひらる。是等は歐洲、メソポタミア及び日本に發見される。Balts は充分に特にそれ自身の名稱を持つ特徴を有して居る。

(註三) 近世の人類學的文献に於いて Danubeans と Alpines との混淆は特に歴史家を悩ませる。Romans は差別があつた。Caesar の言ふ Aquitani は Mediterranean であつた。彼の言ふ Celts は Alpine, Belgae は Danubeans, Germans は Balts であつた。Homer の言ふ Achaens 及び Hellenes は一般に Danubeans であつた。British Island の Picts は Mediterranean, Goidelic Celts は Alpines であつた。及び Brythonic Celt は Danubeans であつた。其の方言は歴史の面白う Paradoxes から歐羅巴の Welsh, Cornish 及び Bretons に依つて使はれて居る。

(未完)